鎖

上

黒岩重吾

毎日新聞社

霧の鎖・上

定価一一〇〇円

昭和五十六年十月十五日 印刷
昭和五十六年十月三十日 発行

著者 黒岩重吾

編集人 川合多喜夫

発行人 関根望

発行所 毎日新聞社
東京都千代田区一ッ橋／大阪市北区堂島／北九州市小倉北区紺屋町／名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

検印省略

0093-400250-7904 Printed in Japan

霧の鎖　上

装幀　松田　穣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

重い手紙

宇田優子は、動かしていた電気掃除機の手を休めると、庭の百日紅の樹に止まっている山鳥を眺めた。その鳥の本当の名前を優子は知らない。少女時代に山鳥だ、と母に教えて貰った記憶がある。雀より少し大きく、羽根の色は緑色がかっていた。

夫の書斎の机の上にある置時計が十一時を告げていた。昼はカレーライスにしよう、と何となく優子は思った。優子が再び電気掃除機を動かし始めると、待っていたように山鳥が羽撃いた。力強い羽撃きで、あっという間に山鳥の姿は優子の視界から消えた。

優子の家は苦楽園の高台にあった。

六甲山麓の高級住宅街は、西の方から芦屋、麓々荘、苦楽園、甲陽園と続いている。

優子の家はかなりの高台にあり、大阪湾も眺められるし、眺望は良い。ただ新しく建った背高いマンションが、ところどころで眺望を遮っている。

優子は電気掃除機を廊下に出した。

夫の書斎隣は娘の阿矢子の部屋であった。高校一年生の阿矢子は十六歳だが、時々三十七歳の優子が思わず圧迫されるような女の匂いを発散させた。阿矢子は、身長一六三糎ですでに優子の身長よりも高い。それに阿矢子はテニス部の部員で汗をかいたまま家に戻って来る。

家に戻ると阿矢子は真先に風呂に入るが、時には風呂に入らず、疲れた、といって部屋に閉じ籠ってしまうことがある。

そんな日の阿矢子の体臭は、発情期の獣の匂いに何処か似ていた。勿論それを感じるのは優子だけかもしれない。

夫の康雄は毎晩のように酒を飲んで戻って来るし、次女の麻衣子はまだ小学校の三年生だった。

優子は阿矢子の部屋に入ってみた。

流行歌手の写真が壁に飾られたり、勉強机に置かれたりしている。教科書、参考書以外は、漫画の本と、テレビ、映画で大宣伝している推理小説ばかりだった。

阿矢子の部屋に入ると、優子は息が詰まるような気がする。阿矢子は、母親が自分の部屋に勝手に入ることを許していなかった。登校する時でも、自分の部屋に鍵を掛けて出掛ける。

その件で、かなり激しく阿矢子といい争ったが、結局優子は負けてしまった。

阿矢子の方には、数え切れないほど理屈があった。並べてみると次のような理屈だ。

1、私を信頼していないのか？

2、友達は皆、部屋に鍵を掛けている

3、勝手に人の部屋に入って、こそこそ嗅ぎ廻るのは最低である
4、疑いの眼で見られていると思うと家出をしたくなる
5、自分の部屋は自分自身である、だから勝手に触られたくない
右の例は優子の脳裡に刻み込まれているものだけで、阿矢子には、まだまだいい分があった。
優子は、そんな阿矢子に対抗するだけの理論を持っていなかった。
優子は阿矢子に高校を出るまで監督するのは、母親として当然でしょう、としかいえなかった。それは、娘に向って、私は親だ、といっているのと同じ種類の無意味な言葉だった。
優子は阿矢子にいい負かされ、論争の焦点は、阿矢子の部屋に鍵を掛けるかどうか、という問題に移った。
つまり阿矢子が学校に行っている間、部屋に鍵を掛けておく、というのだ。
優子は流石に自分一人では駄目だ、と思い康雄に告げた。
康雄は何故もっと早くいわなかったのか、とぶつぶついいながら出社したが、その夜は酔っているのに、早く戻って来た。
そして酔った勢いで、阿矢子を部屋から引張りだし、俺は自分の娘をこの家に下宿させているのではないぞ、と喚き、阿矢子に擲り掛った。優子は、阿矢子を追い掛ける康雄の腰に縋りついて、やっと康雄をなだめた。
阿矢子は二時間ぐらい大声で泣いていたが、鍵を掛ける件は、諦めたのである。
優子が、自分の娘の部屋に入りながら、息が詰まりそうな気がするのは、そういう事件があったからであった。
ただ阿矢子の部屋には、小学校五年生の時に描いた山の絵が飾られている。
あの当時の阿矢子は可愛かった。
優子は、阿矢子と麻衣子と手を繋ぎながら、夕方など、よく近所を散歩した。
優子が菜の花ばたけに……などと唱歌を歌うと、阿矢子も歌った。そして阿矢子は優子に、将来画家になる、と稚い口調で話したりした。当時優子は三十歳を過ぎたばかりであった。
そして康雄は課長に抜擢され、今住んでいる家を建て、人生の希望に燃えていた。優子は、あの時代が自分の人生の中で、一番充実していたような気がしてならない。
まさか、阿矢子がこんなに激しく、自分に反抗し、離れて行くとは、思ってもいなかったのだ。
だから、優子は、阿矢子が小学生時代に描いた絵を、壁に掛けているのを見ると、何となく安心するのだった。
阿矢子の部屋を出た優子は、電気掃除機を二階の廊下に置いたまま階下に降りた。
郵便配達が来たような気がしたからだった。

郵便受けには、ダイレクトメールと、二通の封書、一通の葉書があった。
葉書は高校時代のクラス会の案内状で、封書の一つは、阿矢子の友達の吉竹紀子から、阿矢子に来たものだった。
吉竹紀子の家は、神戸でレストランなどを経営しており、生活が派手であった。
先日、日曜日に家に遊びに来た吉竹紀子の服装を見て、優子は吃驚した。吉竹紀子は阿矢子と同学年だが、シルクのワンピースを着ていたのだ。
何を書いているのか、重い封筒だった。
それに吉竹紀子の字は、高校一年生とは思えないほど上手い。
こんなに重い封筒が阿矢子に来たのは、初めてのような気がする。
優子は封筒を掌に乗せてみた。ずっしりという感じがした。何だか、自分から離れて行こうとしている阿矢子の秘密が、この封筒の中にあるような気がした。
阿矢子はこの頃、学校内での出来事も、優子に話さなくなっていた。
便箋が余りに厚いので、少女の絵を描いた封筒の下部の封をした部分が取れ掛っていた。
優子の眼には、封筒が、読んでみないのか?と誘い掛けているように見えた。
優子は深呼吸をすると、封筒をダイニングキッチンのテーブルに置いた。
電話のベルが鳴ったので、出てみると、見知らぬ女が、康雄の会社の名を口にした。
クラブの女のようであった。
優子は見構え、冷たい声でいった。
「もしもし、こちら宇田で御座居ますが、どちら様でいらっしゃいますか?」
「あら、家の方ですの、済みません」
女は慌てて電話を切った。
康雄の会社と間違って、自宅に電話して来たに違いなかった。それにしてもエチケットを心得ていない女である。康雄の会社は日本でも有名な化学会社だった。火薬類や、合成樹脂、プラスチック、フィルムなどを製造している。薬品会社と提携して制癌剤の開発にも乗り出し、最近は、株式市場でも注目株の一つとなっていた。
康雄はそこの財務次長だった。
ここ、二、三年各方面から招待されて飲んでいるようだが、康雄が招待される以上、一流のクラブに違いない、と優子は思っていた。
事実、一流クラブからお歳暮などが送られて来る。だが、今、電話に出た女は、どう考えても一流クラブのホステスらしくなかった。間違って電話をして来たのなら間違ったで、丁重に謝るべきである。
それに自宅なら当然、康雄の細君が電話に出た、と考える

のが普通である。
とすると、先ず奥様でいらっしゃいますか?・という質問と、何時も御主人様にお世話になっているクラブ××の×子です、という挨拶がなされるべきではないか。
優子は、ホステスにも色々なホステスが居るのを知らなかった。
優子は、康雄が戻って来たなら、女のことを問い質し、あんな礼儀のないホステスのいる店に招待されているのか、と詰問してやろうと憤り、康雄に腹を立てた。
優子は、電話を掛けて来た女と、康雄との間を疑ったのではない。
康雄があんな教養のない女と関係を持つ筈はなかった。
康雄は何に対しても一流好みである。女性も例外の筈はなかった。康雄が密かに浮気をしたとしても、その相手は、もっと教養のある女に違いない。
優子は、一体何を考えているのだろう、と自分自身にも腹を立てた。
下腹部が重苦しくなった。一昨日から生理が始まっている。今日は一番酷い日だった。
優子はトイレに入りタンポンを換えた。

一人で食べる昼食は、何時も簡単だった。
暖かい御飯はジャーに入っている。ジャーの蓋を開けると熱い湯気が立ち昇る。
優子はふと、この電気釜の中に、吉竹紀子から来た封筒を入れたら、どうなるだろうか、と空想した。胸の鼓動が激しくなった。
娘であっても親書の秘密は守らなければならない、それぐらいのことは、優子も知っていた。阿矢子に来た手紙をこっそり開封して読むなんて、阿矢子に対する裏切り行為だった。そして間違いなく卑劣な行為であった。
人間として許されるべきことではない。
だが阿矢子は、優子が腹を痛めて生んだ娘だった。
阿矢子の一方的な攻勢に押され、優子は母としての権威を失いかけている。
優子はそういう自分自身に腑甲斐無さを感じていた。だからといって、母の権威を娘に押しつけて通用する時代ではなかった。
母の権威を押しつければ、娘は反抗し、家出すると脅かす。自分を泊めてくれる友達は何人でも居る、という。窒息しそうな家に居るよりも、ディスコで一晩中踊り狂ったなら、どんなにすかっとするだろうかと囁く。嚇(おどし)だということが分っていても万が一という不安があった。
その不安のために、母は娘に屈服して来たのだ。考えて見れば、理に合わない不本意な屈服だった。本来なら、母が叱責すれば、娘は頭を下げて聞かねばならない。
優子は自分の少女時代を思い出した。

優子の実家は兵庫県の三田にあった。金物問屋で実家は裕福だった。確かに高校時代の一時期、優子は母に反抗したが、阿矢子のようにストレートには反抗しなかった。

帰る時間が遅いといって両親に怒られた時、優子は夕食を摂らずに自分の部屋に籠った。それがせい一杯の反抗だった。

そして両親は、娘の反抗の限度を知っていた。だから幾らでも怒れるのである。

ところが現代では、親に対する子供の反抗の限度がなくなりかけている。

つまり親子の争いに、かつてのようなルールがないのだ。

何をされるか分らない、という不安感で親は、内心子供を恐れながら叱責する。

優子の場合もそうであった。阿矢子が増長するのも当然だった。

どんな時代になっても、母には母の権利がある。子供を思う愛情に裏打ちされた権利だった。その権利まで放棄するのは、母として失格である、と優子は思った。

娘に来た手紙を、密かに開封することに対する罪の意識を、優子はこれまで押えつけられていた母の権利で拭い去った。

優子は厚い封書をジャーに放り込んだ。

十分後に優子はジャーの蓋を開けた。

一番心配だったのは、インクの字が滲んでいないか、ということだった。

幸い吉竹紀子のペン字が細かったせいか、別に滲んでいない。

優子は息を呑みながら、ピンセットで少し開きかかった封筒の下封の部分をつまんだ。

静かに引張ると、待っていたように剝がれる。剝がれ方は実に滑らかで、身体がぞくぞくするほど気持良かった。

優子は、封筒を開きながら、エクスタシーさえ味わっていた。

吉竹紀子は上等な和紙の便箋に如何にも女性らしい字を書いていた。高校一年生の字とは到底思えなかった。

ペン字を習っているに違いない、と優子は思った。阿矢子は、週に二日、数学塾に行っているが、他の習い事は一切拒否していた。

阿矢子のグループの中で、二日以上塾に通っている者は居ない、というのであった。

そんなことをすれば、ガリ勉と睨まれ、友達から排斥されるというのだった。

だが阿矢子は、吉竹紀子に関して、すでに嘘をついていた。

ペン字を習っていなければ、こういう字は書けなかった。つまり吉竹紀子は、学習塾に通う以外に、ペン字も習っているのである。

胸の鼓動は音を立て、優子は息苦しくなった。

高校時代、好きだったボーイフレンドから初めて来た手紙を読む時の緊張感に何処か似ていた。
……アコ、アコは清川君と遂に愛しあったのね、アコからそのことを聞いて、紀子、眠れなかったわ、今夜もまだ眠れないので、アコに手紙を書いているのよ！
痛かった？　すごく痛かったでしょう！
でもその痛みこそ愛のあかしなのね、アコの勇気に拍手を送るわ!!
でも紀子、色々知りたいのよ、清川君、身体が大きいから、きっとペニスも大きいでしょう、アコは愛情で耐えたのね、でも終りまで痛かったの？　痛さだけだったの？　感じなかった！
御免ね、こんなこと聞いて！
だって紀子も思案中なの、始めから終りまで痛さだけだったら、紀子、とうてい耐えられないもの、紀子って弱虫で卑怯者なのよ
ねえ、少しは良かったんじゃない？
紀子は、本当のことを知りたいの！
そこまで読んだ優子は、軽い眩暈に襲われ、椅子に腰を下ろした。
アコは阿矢子のニックネームである。
どうしよう、どうしようと優子は胸の中で呟いた。
優子は手紙を置くと、電話機の傍に行った。本能的に康雄に電話しよう、と思ったのである。

だがそれはまずかった。
康雄は酒を飲み、阿矢子を擲りつけるに違いなかった。
そんなことになれば、優子が阿矢子に来た手紙を密かに読んだことがばれてしまう。
それこそ、阿矢子は優子を許さないだろう。優子は手で顔の汗を拭いた。
落ち着かなければならない、と優子は何度も自分にいい聞かせた。
優子には、これ以上、手紙を読む勇気はなかった。
どんな恐ろしいことが書かれているかもしれない。
それに優子は、立ち上れないほどの打撃を受けたのだった。
優子は便箋を封筒に入れようとした。
蒸したために便箋が膨んだのか、なかなか入り難い。
貧血気味だった頭に急に血が昇って来た。
優子は便箋を、捻じ込むようにして封筒に入れた。
こんな穢らわしい手紙を、阿矢子に渡す必要はなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

深刻な会話

優子は暫く茫然と椅子に坐っていた。

チャイムが鳴った。インターホーンのボタンを押すと、馴染の洗濯屋の声が聞えて来た。優子は、今日は用事がない、と断った。

「御主人の背広、持って来ました」

「じゃ、仕方ないわ」

と優子は自分で何を喋っているのか、意識していなかった。

「ええ、何ですか?」

と洗濯屋が驚いて答えた。

何時も、出来上りが遅い、と叱ってばかりいる洗濯屋である。

「何でもないわ、持って来て頂戴」

「奥さん、鍵が掛ってますがな」

ああそうだった、と優子は我に返った。

優子はどんな時にも、勝手口のドアの鍵は掛けておく。そういう点で優子は用心深い方だった。洗濯屋の後から八百屋と、デパートの配達人が来た。優子は人に会うのが煩わしかった。だからといって、自分一人でこの悩みを解決出来ない。

優子は二人の友人の顔を思い浮かべた。

一人は青木和子で、もう一人は畑野恵美子だった。

青木和子は、優子が三年ほど前、英会話を習っていた頃知り合った女性である。優子より二つ下だから三十五歳だった。明るく聡明な感じの女性だが、付合って驚いたのは、主人と別居していることだった。

和子の夫の秀夫は、二十も年齢下の女性と芦屋のマンションで暮しているという。

和子と秀夫の間には、小学生の二児が居た。二人共男の子だが、青木秀夫は妻子を捨て、若い女性と同棲しているわけだ。

和子は何度か離婚を考えたが、子供の将来を考え、我慢しているようだった。

それに和子は、ファッションデザイナーとして優れた腕を持ち、秀夫と別居するようになってから、神戸の婦人服・下着メーカーの会社に、顧問の形で週三日勤めていた。

生活面では、秀夫から、かなりの生活費が送られて来るので、自分が稼いだ分は小遣いにしていた。別居夫人という精神的な悩みは、優子の想像外だろうが、物質面では優子より豊かだった。

畑野恵美子は、小学校で麻衣子と同級生の令子の母親だった。二人共PTAの役員をしておりよく喋るようになったのだが、恵美子には、他の奥様族にない人間味があった。優子

がミスをしたような場合、庇ってくれる。それに他人の悪口を余りいわない。
その代り、主人が帰宅しない夜など、一人で酒を飲みに行ったりするらしい。
恵美子の夫の畑野忠高はA証券会社の法人部長だった。まだ四十二歳の若さだが、仕事の面でも、遊びの方でもなかなかの遣り手らしく、夕食を家族と一緒に摂るのは、月に一度か二度ぐらいらしかった。
優子の夫の康雄もよく飲むが、恵美子の話を聞いていると、康雄は良き夫といわねばならない。畑野忠高は無断外泊など、しょっちゅうだ、という。
「だから私も飲みに行くのよ、友達がキタ新地でスナックをやっているので、むしゃくしゃした時は、そこに行くの、色々と面白いことがあるわ」
恵美子は何度か、飲みに行こう、と優子を誘った。だが優子は恵美子と飲みに行ったことがなかった。そういうことをするのは、妻として、はしたないという意識があったからだ。
今優子が、和子と恵美子を思い浮かべたのは、この二人になら、何でも話せるし、相談が出来る、と判断したからだった。
結局優子は、和子の家に電話した。
和子は夫と別居している。だから和子と恵美子を比較したなら、和子の方が親身になって聞いてくれそうな気がした。
夫との問題で苦労しているせいか、和子は人生観が深い。それに和子は、矢張り優子より不幸だった。
娘の身に起きた一大事を、自分より幸せな女性に打ち明けることは出来なかった。優子は甲陽園にある和子の家に電話した。
和子の姉が電話に出て、和子は神戸に行っている、と告げた。
和子の姉と和子は二十歳近く年齢が違う。和子と秀夫が別居するようになってから、姉は和子の家に住むようになった。
子供達の世話をするためである。未亡人である和子の姉には子供がなかった。
優子は和子が勤めている神戸の会社に電話した。
「どうしたの、元気のない声を出して、旦那さん、浮気でもしたんじゃないの?」
和子の声は明るく、はきはきしていた。
「それぐらいだったら良いんだけど、もっと大変な問題なの、阿矢子のことなのよ」
優子は泣きそうな声を出していた。
「阿矢子ちゃんがどうかしたの、恋人でも出来たの?」
「そういう問題だけど、主人にもいえないのよ、阿矢子に来た手紙をうっかり読んでしまったの、ショック……」
優子は簡単に手紙の内容を説明した。
「うーん、そりゃショックねえ、うーん」

和子は吃驚して溜息をつくと、黙り込んでしまった。優子は出来たら会いたい、といった。ところが和子は、今日はスケジュールが詰まっていて、家に戻るのは深夜だ、という。

「そういう問題なら、矢張り御主人に相談なさった方が良いんじゃない、そうよ、夫婦って、こういう時こそ、協力し合うべきだと思うわ……」

和子は優子に、今こそ、夫婦の存在価値を再認識すべき時ではないか、といった。

和子にそういわれると、優子は一言もなかった。夫と別居している和子に相談すべきではなかった、と優子は反省した。

多分和子は、そういう問題を夫に相談出来なくて、夫婦といえるか、といいたいのかもしれなかった。

優子は恵美子に電話したかったが、麻衣子と令子が同級生なのを考えると、矢張りこういう問題は話し難い。

結局優子は康雄の会社に電話した。

康雄は仕事の関係で今夜は遅くなる、という。優子はその言葉を待っていたように、阿矢子の身に大問題が起きているのに、飲みに行って、ホステスとじゃれ合う方が大事なのか?と噛みついた。

それは康雄にとっては予期せぬ攻撃だったようだ。康雄は一瞬詰まり、どういう問題なのか、具体的に話してみろといった。

「電話では話せないわ、兎に角、今夜は父親として、夫として行動して欲しいんです」

優子は切り口上でいった。

康雄は黙り込み、暫く考え込んでいる様子だったが、仕方ないだろうと呟いた。

その呟きは、社の部下から家に電話が掛って来た時の口調と何処か似ていた。

「分った、じゃ飯だけ済ませて家に帰る、大事な席なんだ、今になってキャンセルするわけにはゆかない」

「ええ、それじゃ私、大阪に行きます、家じゃ、話せませんから……」

「阿矢子の身に何があったんだ? もう少し具体的に話せないのかな」

「電話じゃ無理、といっているでしょ、あなた、本当に阿矢子のこと、心配しているの?」

「分ったよ、じゃ、食事もキャンセルする、七時に梅田で会おうか」

流石に康雄は少し不安になったようだった。

宇田康雄は四十八歳だった。額はかなり禿げ上り髪が薄くなっているが白髪は余りない。肌は艶やかで、頬は赧らみ、如何にも大会社の幹部といった感じである。

だが今夜の康雄は別人のように落ち着きがなかった。康雄は優子に、何故勝手に手紙など開けて見たのか、と憤り、優子が、封筒が破れていたのよ、読んでしまった以上仕方がな

いでしょ、と反撥すると、苦々しく煙草の煙を吐き、酒を飲んだ。
大阪駅前に建った新しい高層ビルの地下の食堂街の割烹店で、優子と康雄は、もう一時間以上話し合っていた。
優子は昼食を摂らなかったので、空腹を覚え、魚や焼肉など食べたが、康雄は阿矢子に来た手紙を読み、途端に食欲を失ったようであった。
康雄の前には、女店員が運んで来た注文の品が、殆ど箸をつけないままで置かれていた。
康雄がショックを受けることは分っていたが、現実に、父親の狼狽振りを見ると、不思議に優子の気持はおさまって来た。
つまり優子は、吉竹紀子の手紙から受けたショックを、康雄に分けることで、自分の悩みを半減することが出来たのである。
勿論優子は、康雄に悩みを分けたことを、意識していなかった。ただ何となく、久し振りに、夫婦だな、という気持で康雄を眺めることが出来たのである。
康雄の額に浮いた汗を見て、今更のように禿げ具合が進んで来ているのを知った。部下や取引先からは貫禄と見られる康雄の容貌も、優子にとっては夫婦のしがらみの象徴のように思える。
「それで、この清川というのは同級生か?」
康雄は眉を寄せて便箋に視線を落した。
「あなた、阿矢子はこの春から高校よ、高校は女子生徒ばかりです、男女共学は中学校までよ、それぐらいのこと、父親として、知っていて貰わなくちゃ」
「ああ、そうか、高校は女生徒ばかりだったのか、とすると、高校生か大学生か、分らないわけだな、不良グループの一人かも分らん」
「阿矢子は十六ですよ、十六の女の子にいたずらするなんて、不良にきまっているわ」
「いたずらじゃないだろう、この手紙の文面では行為を遂行している」
康雄が顔をしかめたのは、痛かった? すごく痛かったでしょう! というリアリティーのある文章を思い出したせいかもしれない。
「ええ、それは分っているわ、でも阿矢子はまだ十六よ、男女のことは何も分らないのよ、だから阿矢子はいたずらされたのよ」
優子は、いたずらという言葉に固執した。阿矢子が、自分の意志で男に抱かれたなど、それが事実であっても信じたくなかった。
「それはどっちでも良いがね、しかし何だな、女というやつは、最初、そんなに痛くても我慢するのかね?」
康雄は煙草の火を消すとビールを飲み、上眼遣いに優子を見た。優子も急にビールが飲みたくなった。優子は手を挙げて女店員を呼び、ビールを注文した。

優子と康雄は見合結婚だが、優子が最初に関係した男性は康雄ではなかった。
優子が京都の女子短大に在学中、スキー場で親しくなった大学生の今来だった。
あの時の痛さを優子は今でも覚えている。
そして今来が二度目に要求した時、今来を拒絶したのは、矢張り激痛のせいかもしれなかった。肉体的な痛みを精神的なエクスタシーに変えるだけの愛情を、優子は今来に抱いていなかった。そして今来は、優子が応じないのを確認すると、何の未練も残さず優子から離れて行った。
寧ろ優子の方が未練を残したほどだ。
優子は今来のことを康雄に話していない。だから康雄は、優子が処女で結婚した、と思っている。
女店員が新しいビールを運んで来たので、優子は康雄のコップに注いだ。それから、自分のコップに注ごうとすると、康雄が、
「俺が注いでやる」
といってビール瓶を持った。
優子は眼を閉じ、一息に半分ほど飲んだ。喉が渇いていたので凄く旨く、もう少しで、ああおいしい、といってしまうところだった。
「で、どうなんだ?」
康雄が口をとがらして優子を見た。
「女性だって色々よ、でも、私のお友達で高校時代から遊んでいた富沢さんなんかの話から想像すると、高校時代興味半分にいたずらをして、余りの痛さにセックスに対する興味を一時失う女性が多いらしいわ、富沢さんも二度目は大学生の時だったというから、三年の空間があったわけね」
「そうか、じゃ、阿矢子の場合も、その可能性があるわけだ、ああ、その可能性に縋りたい、比率としては、どの程度だね?」
藁にでも縋りたい思いでいる康雄の眼を見て、優子は首を横に振った。
「そんなこと、分らないわ」
「だって、最初の痛さなんて男には分らない、君の場合、どうだった?」
「私は、あなたが最初の男性ですからね、それに正式に結婚しているし、痛いなどといって、拒否出来ないじゃないの」
「ああそうか」
康雄は、結婚前に、優子の男性関係がなかったのが無念そうな口調だった。
優子は今来のことを告白しそうになったが、慌てて残りのビールを飲み、その衝動を押えた。
「明日にでも、青木さんと畑野さんに訊いてみるわ、ひょっとしたら、阿矢子も、二度と馬鹿な真似はしないかも分らないわ、阿矢子はあれで、なかなか神経質だし、多分一度で懲りた、と思うわ」
優子も、そう祈るより仕方なかった。

「兎に角、じたばたしないことだ、この手紙を読んだことは、絶対知らせてはならん、今、阿矢子は動揺しているだろう、そんな時、手紙を読んだ、といって責め立てたなら、それこそ、何をするか分らん」
「それは分っています、だからあなたも、胸に収めていて欲しいの」
「分っている、それと、もう阿矢子宛の手紙を勝手に開封なんかするな、そうだ、これから月一度でも、家族揃って、食事に行くようにしようじゃないか、俺にも反省しなければならない点があると思う、兎に角参った、仕事で神経を磨り減らしているのに、娘に悩まされるなんて、情けない」
「私だって情けないわ」
康雄は箸を持つと、冷えた焼肉を口に運んだ、不味そうな表情で呑み込むと手を叩いて女店員を呼んだ。驚いたことに康雄は、新しい焼肉を、もう一人前注文した。
「あなた、それ捨てるの?」
と優子は吃驚して眼を剝いた。
「心配するな、交際費で払う」
と康雄は吐き出すようにいった。
優子は、康雄が月にどのぐらい交際費を遣っているのか知らなかった。
恵美子の話では、恵美子の主人の畑野の交際費は、月に百万できかない、という。
何時だったかそのことを康雄に話すと、康雄は苦い顔で、向うは招待する方だから交際費は多いが、こっちは招待される方だから少ない、と答えたことがあった。
優子は漸く周囲の客達に視線を走らせた。
場所柄、サラリーマン風の客が多かった。
それでも、中には優子の眼を引くような客が居た。スポーツシャツの男が、ホステスらしい女達に囲まれていたり、ネクタイは締めているが派手な上衣の中年の男が、バーのマダム、といった感じの女性と向い合っていたりした。
「さあ、そろそろ出ようか……」
康雄が女店員を呼んだ。
二人が割烹店を出ると、隣の寿司屋から背の高い中年の男が現われた。色が浅黒く精悍な顔をしている。男は一人ではなかった。
モデルのような華やかな感じの女性を連れていた。
「やあ、これはどうも」
男は吃驚したように康雄に挨拶し、優子にも会釈した。
「畑野さん、家内です」
康雄は憮然とした表情で優子を畑野に紹介した。
「家内が、何時もお世話になっています」
畑野が観念したように姿勢を正して頭を下げた。優子はやっと、その男が恵美子の夫の畑野であることを知ったのだった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com